

志賀直哉



芥川龍之介
芥川龍之介
斎藤茂吉
萩原朔太郎
川端康成
堀辰雄
山本周五郎
太宰治

新潮日本文学アルバム

志賀

直哉

新潮社

評論
紅野敏郎
加賀乙彦

資料提供協力者

阿川弘之
入江泰吉
尾崎松枝
木下味子
柳原和夫
島村萬子
土門拳
林忠彦
柳沢真次郎
山内静夫

志賀直吉

飛鳥園

岩波書店

学習研究社

編集協力

日本近代文学館

株式会社木挽社



新潮日本文学アルバム 11
志賀直哉

一九八四年一月一五日印刷
一九八四年一月二〇日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-266-5111

(編集部) 03-266-5411

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替え
いたします。

新潮日本文学
アルバム 志賀直哉 目次

肉親と友情(明治16年・出生～明治39年)

「白樺」創刊前後(明治40年～大正3年)

我孫子時代(大正4年～大正9年)

『暗夜行路』の完成(大正10年～昭和20年)

文体そのままの死(昭和21年～昭和46年・死)

〈カラーページ〉

直哉肖像『暗夜行路』初版本 原稿・草稿

直哉の書と油絵 遺品 日記 全集 他

評伝

ヘッセイ

一枚の写真——遠い遠い親戚

略年譜

主要参考文献

主要著作目録

加賀乙彦

紅野敏郎

紅野敏郎

111 109 104 97 2～ 96 49 78 65 39 17 2

カバー写真「昭和21年」ころの直哉
折込み巻頭口絵『暗夜行路』冒頭草稿
見返しイラスト「直哉の義母妹英子」が記憶していて描いた
麻布三河台27番地の志賀邸見取図

A black and white portrait of a man with dark hair, looking slightly to the left. He is wearing a dark jacket over a light-colored shirt. The image has a grainy, textured appearance.

志賀直夫

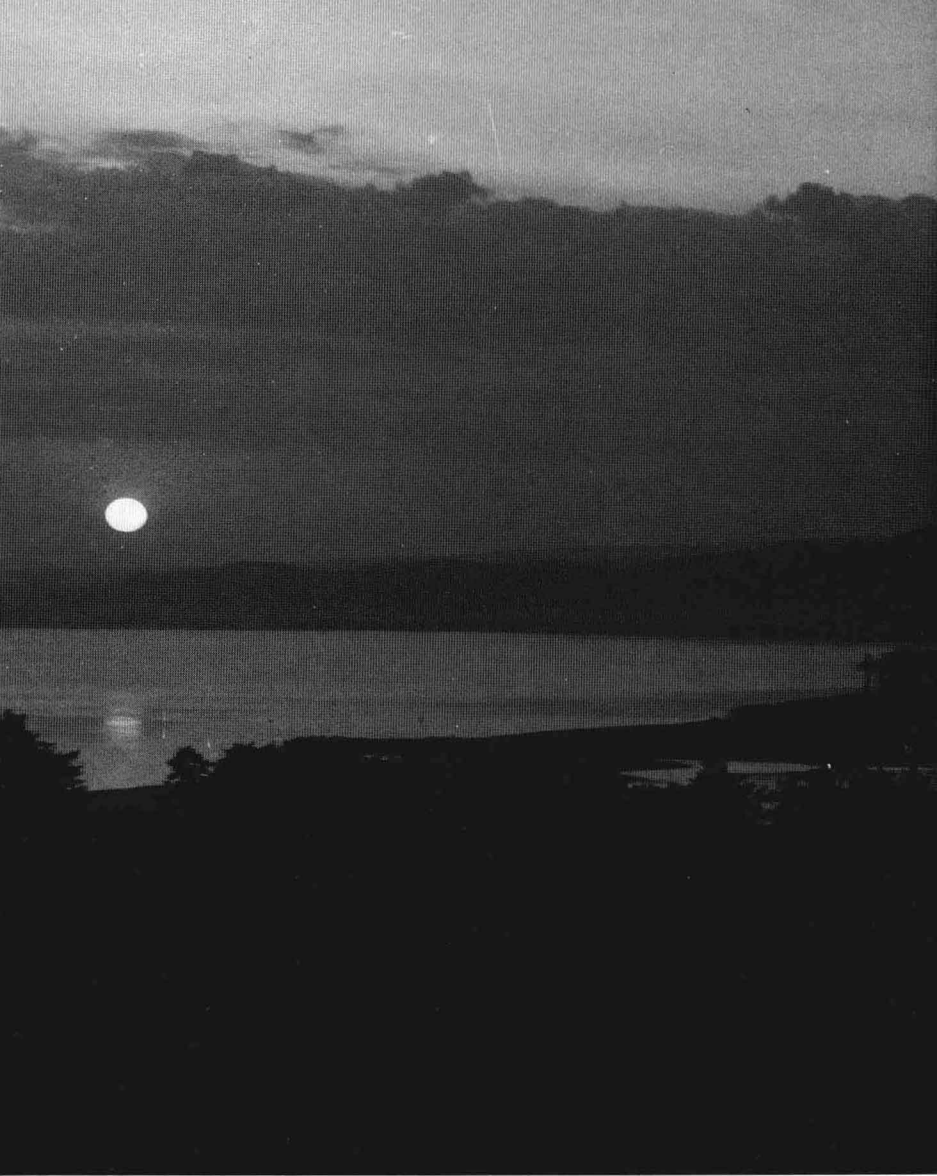
此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



肉親と友情

明治16年・出生
明治39年

前ページ／大正7年ころ。3年間の執筆休止期を終え、大正6年に猛烈な勢いで書きはじめ、7年4月には『夜の光』を刊行、暗夜の中に一筋の光明を見出した時分の直哉



夜見ヶ浜の日の出。『暗夜行路』は大山の夜明けをこう描く。「まちの灯も見え、遠く夜見ヶ浜の突先にある境港の灯も見えた。或る時間を置いて、時々強く光るのは美保の関の燈台に違ひなかつた。湖のやうな中の海は此山の陰になつてゐる為め未だ暗かつたが、外海はもう海面に鼠色の光を持つてゐた」



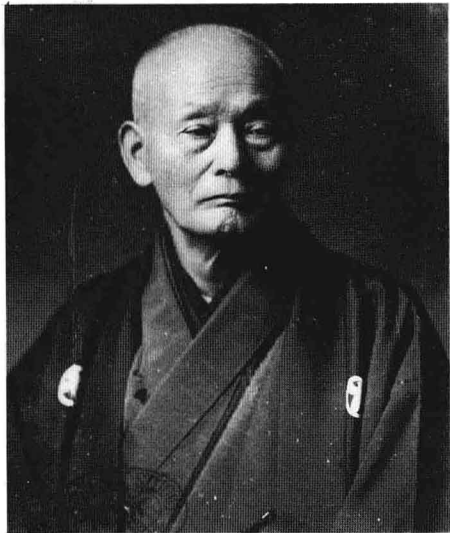
↑祖父直道兄弟(明治29年4月)。前列左より佐藤おのの(66歳)、直道(70歳)、西おりき(79歳)、後列左より半谷重国(61歳)、石田茂宗(64歳)

△祖父直道(明治32年11月、73歳)

→祖母留女。直哉の初めての単行本の表題は祖母の名をとって「留女」と名づけられた



志賀直哉は、第一銀行石巻支店に当時勤めていた慶応義塾出身の父直温、伊勢亀山藩の佐本源吾の娘銀の次男として、明治十六年二月二十日に生まれた。戸籍の上ではたしかに宮城県石巻の人、ということになるが、父は二年後第一銀行を辞し、東京にもどり、山の手の子として育てられた故に、本質的には東京麻布の環境のなかで成長した、というほうが実際のでもあり、気持の上からいってもびったりする。また次男ではあるが、兄直行は満二年あまりで夭折している故、実質的には志賀家の長男として成育する。しかもかつては相馬藩の二百石の武士であり、維新後は相馬家の家令として疲弊した主家の財政立て直しの役目を果し、一方では二宮尊徳の影響も受けていた祖父直道と愛憎の起伏の激しい祖母留女によって育てられたという特殊な成長のしかたをしている。さらに実母銀は直哉が十二歳のとき死去、義母浩が直哉の新しい母として



なほはる
父直温



↑生母銀(左)とその妹木村秀子
←明治17年2月、満1歳の直哉



志賀家に入ってくる。直温と浩との間には英子^{きこ}をはじめ多くの妹や年齢差の甚だしい弟が生れる。直哉の成長過程の上で、これらの肉親の果たした役割は実に大きい。その上直道^{なおみち}が引きとった四つ年上の「叔父直方^{なおかた}」も直哉周辺の重要な人物として登場する。これらの肉親との間に激烈に生じた愛憎のドラマ、それが志賀文学の第一の核となる。



明治26年、学習院初等
科4年(10歳)の直哉



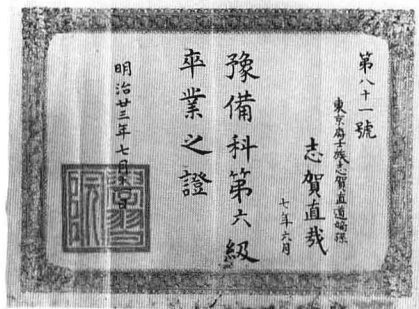
明治20年、4歳の直哉



明治20年夏、4歳の直哉



学習院初等科卒業証書



学習院初等科予備科卒業証書

三歳のとき、東京で開設された二番目の幼稚園である芝麻布有志共立幼稚園に入り、ついで学習院にすむ。肉親のなかではもっとも強い影響を受けた祖父直道は、旧相馬藩の財政立て直しのため、古河市兵衛とともに足尾銅山の開発に着手。その間に世を騒がせた相馬事件が起り、家臣錦織剛清は旧藩主の死去問題をタネにした『神も仏もなし闇の世の中』を刊行、直道らを告訴し、志賀家は家宅捜査を受け、直道は七十五日間拘引されたが、免訴となり「晴天白日の身」として帰宅。相馬事件はここで解決となるが、直哉の心のなかに少年の日の憶い出として強く残る。「王者



学習院中等科時代の直哉

明治廿九年二月十日
封 武蔵國東 三河台 志賀直道 第十七号
芝園芝公園第十七号
芝園芝公園第十七号

安房國朝夷郡千倉温泉
三百六十七番地渡辺太十郎方
志賀直道閣下

科 去書八日は所書面差上げ
得共温泉へ所出後より
念の至りより所出後より
片病氣も甚差宜く同所安ん
下度外次も生傷も無事新学致
り又二昨日の日時にも大雨雷
鳴を未かりて一時止まると
其故外所收を感し
當地も餘程寒氣は
薄らぎ若めき
何程早く帰る事
願ひ上り
敬白
志賀直道拜

志賀直道殿



の民は悠々如たり」という言葉の通り、祖父の存在は志賀家に悠々とした気分をみなぎらせていく。

父直温は総武鉄道会社に入り、やがて実業家としての手腕を発揮、志賀家の財をつくり、明治三十年、一家は麻布区三河台町二十七番地の邸宅（千七百坪）に移る。一時期祖父の関係した足尾銅山より発した渡良瀬川鉍毒事件は、明治期における国内での屈指の社会問題となり、直哉も被害地視察に行こうとしたが、父にきびしく反対され、激論をたたかわす。その父と子の対立を祖父は柱によりかかって徹頭徹尾一言も言わず、黙って聞いていた。



↑ 明治29年2月12日付、千倉温泉滞在中の祖父直道に宛てた手紙
→ 東京麻布三河台の志賀邸の門と玄関。この写真は、大正5、6年、改築後のもの。なお、妹英子が記憶で描いた三河台の家の見取図を本書の見返しに載せた
↓ 学習院中等科時代の直哉

学習院時代(明治35、36年ごろ)、富士登山記念写真。前列左より3人目黒木三次、中列左より2人目松平慶民、前田利為、後列左より2人目が直哉



左より直哉、森田明次、有島生馬、佐久間忠雄。『融まれた友情』にこの写真のことを書く。『横須賀で四人で撮った写真が今も僕の家に残っているが、裏に『明治二十九年七月横須賀に遊の時之を写す』と僕の下手な字で書いてある』



2台の自転車を操り得意気な直哉。のちのことだが、昭和26年に『自転車』という作品を書く



→「謹呈 有島生馬君」と裏書のある明治30年9月30日の写真

←沼津の正親町公和の別邸近く、松の木に登って。右より武者小路実篤、直哉



学習院時代の直哉は二年落第して武者小路実篤らと同級になる。はじめは有島生馬（生馬）らと親しくつきあい、スポーツ好きの端正な学生であった。やがて歌舞伎・女義太夫・寄席に熱中、それも一月に何十回と通うほどの熱の入れかたであった。木下利玄や正親町公和もその仲間であった。日露戦争のさなかにおいても、直哉らの関心の中心はつねに歌舞伎であり、女義太夫であった。明治三十七年、三十八年の日記のなかには、その熱中ぶりが克明に記されている。のち広津和郎らを前にして語った回想『稲村雑談』のなかにも「芝居は歌舞伎座か明治座、それと東京座、正月は毎年、前の左団次が横浜の喜楽座にかかるので二月に横浜まで出かけた。しかも、最初の頃は一つ芝居を二度も三度も見ないと気が済まず、それも立見かなんかではなく土間の真ん中」で見たと述べられている。一時は歌舞伎以上に女義太夫にこり、とくに豊竹昇玉に夢中になり、昇をドイツ語で *auf-behen* と訳し、略して「アウフ」と言っていた。有島生馬がヨーロッパに留学してからも、生馬に日常の生活をめんめんと書き送ったりした。生誕百年を記念しての第二版の岩波書店版『志賀直哉全集』においては、新資料の巻に当時の生馬宛書簡が多数収められている。



棒高跳をする直哉（明治33年春、中等科5年）

自転車に乗る直哉（明治33年1月1日）



↑ 学習院中等科5年（明治33年）春、ボートレースで優勝した時、優勝旗を持って
↓ 学習院高等科に進学のころ（明治36年）





明治38年元旦。左より柳谷午郎、直哉、田村寛貞、白杉、米津政賢、松平春光、有島生馬



里見淳よりの絵ハガキ(明治39年4月8日付)

武者小路実篤よりの手紙(明治38年5月23日付)



学習院正堂前にて、明治39年5月15日撮影。この六月に高等科を卒業予定の一部三年級の学生たち。前列左より2人目直哉、細川護立、木下利玄、二条博厚、2人おいて三島弥吉、右端武者小路実篤